Kyushu University Hospital Information

診療科紹介

- 診療科 医科部門
- 診療科 歯科部門
- 中央診療施設等
- 院内措置施設等
- 別府病院

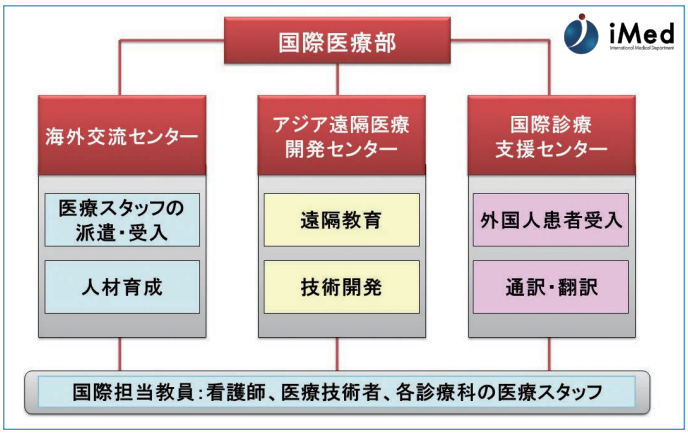
国際医療部

国際医療部はアジアをはじめ世界における国際化拠点として医療・教育・研究のすべてにおいて国際・社会貢献を実現します。

部長　中島直樹

[組織体制]

国際医療部は、国際交流促進担当の「海外交流センター」、国際遠隔医療教育ネットワーク構築担当の「アジア遠隔医療開発センター」、海外や国内の外国人患者受け入れ担当の「国際診療支援センター」を統括します。部長および副部長（専任准教授）を中心として、各センターには、全員が英語のできるスタッフを配置するとともに、各診療科から選出された国際担当教員などと一緒に協力体制を築きます。



海外交流センター

海外派遣や外国人研究者受け入れなどの国際的人事交流を通し、世界で活躍できる人材の育成を目指します。また海外から訪問する医療スタッフのニーズに応え、快適で有意義な滞在をサポートします。

海外医師の受け入れ

[組織体制]

センター長（兼任）を中心として、医師4名（うち1名専任）、国際コーディネータ2名、事務2名（うち1名専任）を配置しています。

[業務内容]

■海外相互訪問・人事交流の企画・調整
　海外の大学・医療施設への人材派遣や受け入れ
■医師・技術研究者の受け入れ
　海外医師・技術者の受け入れ、研修プログラムの実施
■国際共同研究の調整・支援
　海外医療施設との遠隔研究交流を支援
■部局間協定の推進・評価
　国際的な人事交流や共同研究に関する規定の策定
■海外交流関連事務処理の支援
　ビザ取得、宿舎予約、旅費や謝金の支払い手続きなど
■院内国際交流窓口の一本化
　施設見学のコーディネート
■病院職員に対する人材育成サポート
　職員向け英会話、国際医療部セミナーの実施
■医系地区横断的な人的ネットワークの構築
　医系地区国際化フォーラムの実施

アジア遠隔医療開発センター

アジアを中心に世界各国の医療機関との間に構築された研究教育用の超高速インターネットを活用し、国際的な遠隔医療教育の中心としての役割を果たします。

遠隔医療会議室

[組織体制]

センター長（兼任）を中心として、医師1名、講師1名（技術系）、学術研究員2名、技術スタッフ3名、国際コーディネータ4名を配置しています。

[業務内容]

■日本の先端的医療技術の発信
　早期胃がん診断など日本の先端技術を海外へ発信
■国際遠隔教育プログラムの企画
　世界各国の状況を踏まえ魅力的な教育プログラムを企画
■各国担当者との調整
　国際コーディネータによる各国間の連絡・調整
■プログラムの実施と評価
　継続的かつ発展性のあるプログラムを実施
■遠隔医療システムの改良・開発
　世界中の医療機関と高品質な映像音声の接続を実現
■他施設・他国へのICT技術指導
　施設間の技術格差を埋め、安定した接続を実現
■国際組織の事務局、連携
　アジア太平洋地区における遠隔医療教育の中心的存在
■領域横断的セミナーの定期開催
　国際的な人的ネットワークの構築を促進

国際診療支援センター

①海外の外国人②海外の日本人③国内の外国人、と定義する「国際患者」に対して、日本の先進的医療を適正かつ迅速に提供し、アジアにおける先進的医療拠点として、国際貢献を果たします。

国際患者の対応

[組織体制]

センター長（兼任）を中心として、医師2名（うち1名兼任）、通訳2名（英語1名、中国語1名）、事務3名（うち2名兼任）を配置しています。

[業務内容]

■国際患者の受け入れのための連絡および調整
■国立大学病院国際医療連携ネットワーク事務局活動
■福岡県・市などの医療国際化活動との協働
■一般財団法人日本医療教育財団「外国人患者受入れ医療機関認証病院（JMIP）」活動

具体的な業務
・窓口ホームページからの国際患者受入れ相談・前評価
・国際患者の受入れ先医療施設・診療科の検討・調整
・海外からの遠隔医療相談の受入れ・実施
・医療通訳・翻訳、通訳タブレット等の貸出し
・地域における国際拠点病院化、各種委員会などへの参加
・外国人診療諸問題への対応
・身元保証機関等との調整

薬剤部

薬剤部は、医薬品を専門に取り扱う部門として、安全かつ適正な薬物療法の実施、医薬品の適正使用推進という責務を果たすために、より質の高い薬剤業務の展開を目指しています。

部長　家入一郎

抗がん薬調製支援装置

[運営体制]

薬剤部は、薬務係、調剤係、病棟係、TDM・院内製剤係、注射剤係、薬品情報係、治験薬管理係で構成され、相互に有機的な協働体制をとり、薬物療法の有効性や安全性の確保に努めています。また、医療安全、感染制御、栄養サポート、緩和ケアなど病院内の多くの活動に積極的に参画し、臨床におけるチーム医療の推進に関与しています。

[運営方針]

薬剤部では、有効で安全性の高い薬物療法に貢献するため、薬剤に関る医療事故の防止に努め、医薬品情報を有効に活用し、業務の効率化を図り、すべての患者さんと医療スタッフへの良質な薬剤業務サービスを実施しています。

[業務内容]

内用・外用薬の調剤、注射薬の患者別施用単位調剤、全科対象のTPN調製、抗がん剤調製、院内特殊製剤の製剤設計と調製、免疫抑制薬・抗MRSA薬を中心とした薬物血中濃度測定とモニタリング、医薬品情報の収集・提供、入院患者さんに対する薬剤管理指導業務、疑義照会によるリスクマネジメント、医薬品の品質・安全性と薬物療法の安全確保に関する試験・研究

[特色]

1)病棟において薬物療法の有効性や安全性の向上に資する薬剤関連業務を展開しており、全国トップクラスの実績をあげています。また、三交代勤務体制により準夜帯で注射薬の調剤・TPN調製を行い、注射薬の効率的な運用に貢献しています。

2)抗がん薬調製については、業務効率化の一環として一部自動化しています。また、がん領域における薬剤師外来を展開しており、保険薬局と連携した外来がん化学療法の質の向上に取り組んでいます。

3)がん、感染制御、精神科薬物療法、妊婦・授乳婦薬物療法等の認定資格を有する薬剤師が多数在籍しています。その他、医療安全管理部、グローバル感染症センター、入退院・周術期支援センターにも薬剤師が常駐し、質の高い医療提供を目指しています。

4)薬学研究院の協力講座として臨床薬物治療学を担当し、日常診療における医薬品の適正使用を目指した基礎から臨床に至る幅広い研究を行っています。

[教育]

病院薬剤師の学識と技能向上を図るため、主に新人薬剤師を対象とした研修生制度を設けているほか、薬剤師の職能や専門性向上を目的として、がん薬物療法認定薬剤師や保険薬局薬剤師を受け入れています。また、研修医を対象とした処方オーダ研修や、医学部・歯学部学生への処方学の教育をはじめ、薬学部学生への実務実習や講義にも取り組んでいます。

[学会施設認定]

日本医療薬学会認定薬剤師制度研修施設/がん専門薬剤師研修施設/薬物療法専門薬剤師制度研修施設
日本病院薬剤師会がん薬物療法認定薬剤師研修事業研修施設/妊婦授乳婦専門薬剤師養成研修施設
日本臨床薬理学会認定薬剤師制度研修施設

医療技術部

医療技術職員の効率的かつ適正な配置を行い、病院運営と患者サービス向上を図ることを目的とした組織です。最新最善の医療を安全に提供するため、チーム医療の一員として職務・職責を果たすことを目指します。

部長　河野一郎

ICUでの多職種回診

[運営体制]

大学病院での高度・先進医療を医療技術の面で支援するために、12職種約320名の医療技術職員(臨床検査技師、診療放射線技師、臨床工学技士、衛生検査技師、理学療法士、作業療法士、歯科衛生士、歯科技工士、言語聴覚士、視能訓練士、臨床心理士、精神保健福祉士)が所属します。臨床検査部門、放射線部門、リハビリ部門、臨床工学部門、歯科部門の5部門から成り、全人的医療人の育成、医療技術の向上に努めています。

■運営委員会、運営小委員会:運営事項の審議、年度計画・目標への取り組み、労務管理、人事マネジメント

■5つのワーキンググループ:各部門からメンバーを選出して組織し、医療技術部の教育研修、業務改善、広報活動を行う。

1) 教育担当 WG　教育、研修の企画
2) グラウンドラウンド WG　研修会の運営、学術集会の企画、運営
3) 医療安全 WG　医療安全に関する取り組み、研修会の開催
4) 患者サービス向上 WG　患者サービス向上に関する取り組み
5) 広報担当 WG　ホームページの作成と更新、医療技術部概況書の作成

[運営方針]

1. 安心・安全で質の高い医療の提供
2. エビデンスに基づく医療技術の推進
3. チーム医療の充実
4. 部員が自信と誇りを持てる環境作り

[業務内容]

医療技術職員の配属先の中央診療施設長や各診療科長との連携を密に保ちながら下記のような診療業務を行っています。また24時間体制の救命救急センターやハートセンター、ブレインセンターなどの集学的医療にも組織横断的なチーム医療を展開しています。

■臨床検査部門:検査部、病理診断科・病理部、遺伝子・細胞療法部などでの臨床検査データの提供

■放射線部門:放射線・超音波・磁気共鳴機器による検査と放射線治療

■リハビリ部門:総合的な運動機能回復療法と早期社会復帰を目指した各種検査・治療

■臨床工学部門:生命維持装置を用いた診療支援とME機器の集中管理

■歯科部門:口腔ケア保健指導と口腔補綴物の製作、修理

[特色]

■チーム医療の一員として個々の専門的知識・技術を発揮し、多職種で連携して質の高い医療の提供に貢献しています。

■国家資格をもつ12職種から構成されており、自身の専門的知識、技術の向上に努めることはもちろん、全職種共通の社会人教育、医療人教育を行い、人材育成を行っています。

■専門性の高い業務を実践するために、認定資格の取得や学術活動を推奨しています。

[教育]

九州大学医学部保健学科(臨床検査・診療放射線)と近隣大学や専門学校から、各職種の臨地実習生を受け入れています。また、医学生や看護学生も医療技術部の複数の現場で病院実習を実施しています。院内では各職種の専門的知識・技術を活かして医師、看護師、事務職員等を対象とした研修・教育に協力しています。

看護部

看護部は高度かつ先駆的な医療を担う医療チームの一員として、看護の専門性を発揮し、患者・家族や多職種からなる医療チーム、そして地域から信頼されるより質の高い看護の提供を目指しています。

部長　濱田正美

病室での看護ケア

[運営体制]

総務、業務、教育、質・経営、医療安全・法務を担当する5名の副看護部長、42名の看護師長、101名の副看護師長およびスタッフ、看護助手の計1,300余名の看護職員を擁し、35の病棟をはじめ手術部、外来、検査部門、ARO次世代医療センターなど、合計42の看護単位を数える部署で看護を行っています。多部門と連携を図り質の高い医療・看護が提供できるように努力を重ねています。

[運営方針]

看護部の理念と基本方針

私たちは、人間性を尊重し、患者さんに信頼される質の高い看護を提供します。

1. 安全で安心な看護の提供
2. 専門職として豊かな人間性と高度な専門的知識・技術を持ち、自己研鑽に努める看護職員の育成
3. 情報技術を活用した看護の質向上
4. 多部門と協働したチーム医療の促進
5. 看護・教育・研究を通じた地域医療への貢献
6. 積極的な病院経営への参画

2023年度看護部は、①安全で質の高い看護の提供②地域貢献・社会貢献に繋がる人材育成③看護の可視化、質向上への推進④病院経営への積極的な参画⑤接遇の向上⑥健康で安全な職場づくり⑦九大別府病院再開発における福岡地区と別府地区との協力体制づくりを目標として掲げ、やりがいをもって看護ができるよう日々努めています。

[特色]

1. 2008年から助産師外来、ストーマ看護外来、糖尿病フットケア外来、リンパ浮腫外来、腹膜透析外来、造血細胞移植後患者フォローアップ外来、糖尿病透析予防指導外来、がん看護外来の8つの看護専門外来を順次開設しています。外来での医療ニーズの高い患者さんに専門性を活かした高度な看護を提供しています。
2. 看護方式は安全で質の高い看護の提供と人材育成を目的としてパートナーシップナーシング・システム(PNS)を導入し看護を実践しています。この方式は、安全・安心な看護業務ができる体制や経験の浅い看護師の学びの場の構築に、効果を得ています。
3. 看護キャリアセンターと連携し、院内・外を含めた地域全体の看護の質向上に貢献することを目的に活動しています。
4. 専門看護師10名、認定看護師29名、院内認定看護師162名を擁し、多部門と連携した院内での組織横断的な活動や看護の専門性を発揮した質の高い医療・看護の提供に取り組んでいます。

[教育]

看護部キャリアパスに基づき、九大版クリニカルラダーを基盤にした13分野76コースの看護職員教育プログラムを実施しています。また、新人看護職員にはプリセプターシップを取り入れ、育成を重点的に行っています。e-ラーニング、キャリアナビゲーションシステムなどを活用し、自らが学ぶ環境を整え、自立を支援しています。教育プログラムの開発や教育体制を整備し、その一部を公開するとともに地域医療を支える看護職の教育・研修に携わっています。

検査部

検査部の歴史は1957年に始まり、九州大学病院の中でも最も早期に設立された中央診療施設の一つです。その後、設備と検査項目が順次拡充され、検体検査室(化学、血液、凝固、免疫、外注部門)、細菌検査室、輸血検査室、外来検査室、遺伝子・高分子検査室、生理機能検査室の6つの検査室で九州大学病院の大半の検査を行っています。

部長　赤司浩一

オートメーション化された検査ラインと分析装置

[運営方針]

臨床検査室に特化した国際規格ISO15189認定を2006年に取得し、その理念のもと検査業務を行っています。さらに次の方針を掲げ、日本の臨床検査のリーダーたるべく努力しています

■精密、迅速な検査を通して正確な診療に貢献する
■検査データの標準化を推進し、その有用性を通して社会に貢献する
■検査法の研究・開発を通して検査医学の向上発展に貢献する
■次代の臨床検査のリーダー育成のため教育に力を注ぐ

[業務内容]

■血液中の酵素、血糖値などを定量する化学検査、赤血球・白血球・血小板などの血球算定や白血球分類をする血液検査、止血機構を調べる凝固検査、ウイルス感染症、ホルモン、自己抗体などを検査する免疫検査、尿定性や便潜血を検査する一般検査(以上検体検査)
■血液型判定や輸血用製剤の管理を行う輸血検査
■細菌などの培養・同定・薬剤感受性検査を行う細菌検査
■血栓性素因やミトコンドリア病を検査する遺伝子検査
■脳波・心電図・肺機能検査を行う生理機能検査はハートセンター、睡眠時無呼吸センター、ブレインセンターと連携しています。
■治験、外部委託検査のための検体前処理・保管とデータ管理

[設備]

細菌感染症検査システム、遺伝子検査システム、輸血検査システム、生理検査システム、ウイルス肝炎遺伝子検査システムなど、また、検体検査自動化システム、全自動血球計測システム、血液凝固測定システム、時間外検査システム。九州大学ARO次世代医療センター支援の元、複数種の最先端質量分析計(MS)を配備した統合分析システム

[特色]

検査部では入院、外来を問わず24時間365日、検査データを提供しています。また、遺伝子検査を含む血栓性素因検査、ミトコンドリア遺伝子検査、質量分析装置を駆使した次世代の検査技術の開発も行っています。また、グローバルな視点から検査値の標準化を推進し続けています。

[教育]

医学部医学科、保健学科の臨地実習や講義のほか、他校学生や社会人研修も受け入れ、将来の臨床検査分野における指導者の育成、検査医学の発展に努めています。

[学会施設認定]

日本輸血細胞治療学会認定輸血検査技師研修施設
日本臨床検査医学会学会認定研修施設

手術部

手術部はすべての診療科の手術を行う場であり、すべての手術が安全かつ円滑に行える環境の提供に努めています。

部長　中島康晴

[運営方針]

手術を受ける患者さんの安全確保を最優先しながら、高度で多様な手術の円滑な遂行に努力しています。

[業務内容]

医師スタッフが周術期患者管理・麻酔診療と手術室の管理運営に従事し、看護師が手術の準備・介助、患者看護ならびに手術室の管理運営を行っています。また、臨床工学技士が心臓手術時の人工心肺操作、医療機器・検査機器の操作と保守を行っているほか、薬剤師が麻薬や麻酔薬をはじめとする薬剤の管理を、技術専門職員が情報機器管理と材料コスト管理を行い、安全かつ効率的な手術医療の運営に努めています。

[特色]

手術部は、南棟の3階に位置し、隣には集中治療部・救命ICUと冠動脈疾患治療部があります。さらに北棟3階のハートセンターとも隣接し、また、救急専用エレベータで1階の救命救急センター、5階の総合周産期母子医療センターと直結して緊急手術への対応を容易にし、病院の基本コンセプトであるCritical Care Center構想の中心的役割を果たしています。手術室は、無菌手術室、感染症手術室、ハイブリッド手術室、ロボット手術室を含めた計21室を備えており、年間10,000件を超える手術を行っています。

集中治療部

集中治療部は、大手術を受けた患者さんの術後管理や、入院中に重篤な状態となった患者さんに高度な全身管理を行う中央診療部門です。

部長　山浦　健

[得意分野]

集中治療とは、外科系および内科系疾患を問わず、原疾患に併発した呼吸、循環、代謝、神経系などの重要臓器不全に対して、集中的な管理・治療を行うことで臓器機能を回復させ救命することを目的としています。重篤な状態にある患者さんに対して、バイタルサインをはじめとする生体情報を持続的にモニターしながら、人工呼吸器、体外循環装置、血液浄化装置といった生命維持装置を駆使して、総合的・集中的な全身管理を行っています。

[診療方針]

成人から小児・新生児まで、当該科の診療を集中治療部の専任スタッフが専門的立場から支援し、関連する診療科・診療部門と緊密な連携をとりながら高度な集中治療を行うことで、患者さんの状態安定・改善を目指しています。また医療安全に配慮し、高度かつ安全な集中治療を提供することを目指しています。

[対象疾患]

手術後予定入室：心臓・大血管手術、臓器移植手術（心・肝・腎・膵・小腸）、開頭手術など

緊急入室：心停止蘇生後、急性呼吸・循環不全、意識障害・脳卒中、腎障害、敗血症など

放射線部

放射線部門は、九州大学病院のすべての診療科・部門と密接に協力して、放射線に関連する検査、画像診断・インターベンショナルラジオロジー・放射線治療・核医学検査および治療を行っています。

部長　石神康生

IVR-CT装置

[運営体制]

診断・治療・核医学の3部門に分かれ、医師5名（兼任2名）・診療放射線技師68名・看護師13名・事務補佐員など10名で運営しています。業務時間外は、診療放射線技師2名が勤務しています。

[運営方針]

患者さんの負担はできるだけ軽く、短時間に、精密で安全な検査・治療を遂行することを心がけ、放射線科をはじめ他の診療科との密接な連携の下に検査・治療業務を行っています。

[業務内容]

画像診断・インターベンショナルラジオロジー・放射線治療・核医学検査および治療を行っています。

[設備]

■診断部門

1.5T MRI装置1台、3T MRI装置5台、マルチスライスCT装置5台、心臓カテーテル検査装置2台、血管造影検査装置、IVR-CT装置などの最新技術を導入した専用のX線撮影装置や消化管検査・IVRなどに使用するX線透視装置、DXA法を採用した骨塩定量装置、単純X線撮影装置、移動型X線撮影装置、超音波検査装置などを装備しています。

■放射線治療部門

外照射装置リニアック3台（高精度定位システム）、腔内照射や組織内照射の装置（マイクロセレクトロン、シード線源）を使って放射線治療を行っています。

■核医学部門

SPECT-CT装置4台、PET-CT装置2台を装備し、PET-CT検査は外部からも広く検査を受けています。また、専用の施設で、放射性物質を用いた甲状腺疾患や神経内分泌腫瘍、悪性褐色細胞腫の治療も行っています。分子イメージングセンターでは、サイクロトロンが稼働しています。

[特色]

画像診断・放射線治療に関連する最新の機器を多数保有し、高い技術レベル・安全性を維持しています。

[教育]

医学科・保健学科との連携のもと、病院見学や多数の実習生を受け入れ、九州大学病院の放射線診療機器の原理・取扱い・安全管理に関する教育を行っています。また、病院職員に対しても放射線の安全取扱いに関する教育を行っています。

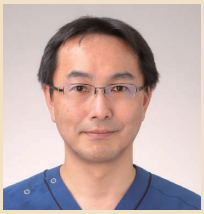
臨床放射線科や保健学科の大学院生の画像診断（被ばく低減撮像法、新たな形態・機能評価画像撮像法開発など）・放射線治療（ターゲットへの線量集積方法の改善など）に関する研究にも積極的に協力しています。

[学会等施設認定]

特定非営利活動法人日本乳がん検診精度管理中央機構（認定番号2269号）、日本救急撮影技師認定機構　指定実施研修施設、（公社）日本診療放射線技師会　臨床実習指導登録施設

救命救急センター

3次救急医療全般、とくに急性心筋梗塞や脳卒中などの心血管病、重症外傷に力を入れています。大学病院として医学生のみならず、卒後医師の研修、救急救命士の訓練などにも取り組んでいます。



センター長　赤星朋比古

[得意分野]

救急、麻酔・集中治療、脳血管、小児、循環器、消化器、感染症、整形、外科の各専門医が、交代勤務体制で重症の患者さんに24時間対応します。各種疾患に応じ専門各科とのスムーズな連携を行い、看護師、診療工学技士、放射線部などとのチーム医療により、大学病院ならではの高度な医療を提供することを心がけています。

[診療方針]

緊急度、重症度を迅速かつ正確に判断し、人工呼吸管理、体外循環補助、血液浄化療法などの高度な機器をタイミングを逃さずに用いることで、早期に社会復帰を果たすことができるよう、患者さん自身の治癒力を引き出す医療を心がけて診療を行っています。

[対象疾患]

■重症多発外傷:ショック、頭部外傷、緊急止血術などを要する症例など
■重症内因性疾患:急性心筋梗塞、重症不整脈、心筋炎、脳卒中など
■重症熱傷:広範囲熱傷、気道熱傷など

[主な治療]

専門部署と連携し、生命に直結した全身管理を行っています。人工呼吸管理(肺保護戦略的アプローチ、非侵襲的陽圧換気法、呼吸理学療法)、循環管理(薬物療法、ペーシング、大動脈バルーンポンピング、経皮的人工心肺、左室補助装置など)、持続血液濾過透析、エンドトキシン吸着療法、脳低温療法など

医療器材サプライセンター

医療器材サプライセンターは、各部署での一次洗浄を廃止し、洗浄・組み立て・包装・滅菌を一元的に行っています。

センター長　吉本幸司

[運営方針]

安心して使用できる安全な医療器材を、安定して医療現場へ提供するために、つねに洗浄・滅菌の質保証の向上を目指します。

[業務内容]

外来・病棟・手術部で使用した医療器材を回収し、洗浄・組み立て・包装・滅菌・保管・供給する業務を行います。回収した器材は洗浄装置(12台)、ダヴィンチ専用洗浄装置(1台)、搬送用カートはカート洗浄機(2台)で洗浄します。滅菌は、高圧蒸気滅菌装置(8台)・エチレンオキサイド滅菌装置(1台)・過酸化水素ガスプラズマ滅菌装置(4台)を用いて、器材に適した滅菌を行います。滅菌の確認は、滅菌工程を監視する物理学的方法、カードや滅菌バッグの色変化をみる化学的方法、枯草菌の死滅をみる生物学的方法の3つの方法を行い、すべてで問題がないことを確認した上で、供給しています。2012年度より滅菌バリデーションを継続し、滅菌のシステムやプロセスが目的に沿って機能しているかを検証して滅菌の質の保証をしています。

[特色]

自動洗浄システム、自動滅菌搬送システム、手術器材自動保管・搬送システムにより、九州大学病院唯一の自動化された滅菌部門として稼動しています。

病理診断科・病理部

病理部は、組織や細胞の顕微鏡的観察により、病気を診断する部門です。正確な診断によって、よりよい治療に貢献できるよう業務を行っています。

部長　小田義直

顕微鏡を用いた病理診断

[運営体制]

業務は医師(病理部、病理学教室)と臨床検査技師15名の連携によって行われています。また、技能補佐員2名、メディカルアシスタント2名が両業務をサポートしています。担当医師は組織診断、細胞診断を行います。

[運営方針]

病理部では、迅速かつ正確な診断を行うため、医師と技師や、病理部と臨床各科とのコミュニケーションを心がけています。

[業務内容]

病理部のおもな業務は病理組織診断、術中迅速診断、細胞診断、病理解剖で、年間にそれぞれ17,664件、1,053件、16,021件、29件の診断を行っています(2022年)。病理組織診断は、生検や手術によって採取、摘出された組織・臓器を肉眼的、そして顕微鏡レベルで詳細に観察し、実施します。必要に応じて特殊染色や免疫染色を加え、診断を確定します。治療の標的分子を組織切片上で検索する検査も盛んに行われています。がんゲノム医療の実践にあたって2021年には2019年に取得したISO15189認定を更新し、遺伝子パネル検査に最適な病理検体の管理と選別を行っています。2021年に新設された分子病理専門医は5名在籍しています。術中迅速組織診断は、手術中に病変の質や広がりをリアルタイムで診断し、手術方針の決定に役立てられます。細胞診断では尿、喀痰、擦過や穿刺吸引(乳腺、甲状腺等)によって得られた細胞で、悪性細胞の有無、炎症性変化などのスクリーニングと診断を行っています。病理解剖は、不幸にも患者さんが死亡した場合、病気の原因・進行度や死因解明のため行います。剖検症例の全例が主治医を含めた臨床医と病理医が参加して行われる臨床・病理検討会(CPC)において討議されています。

[設備]

病理診断支援システム、4Kデジタル顕微鏡モニタ、自動薄切装置、自動染色装置、自動封入装置、凍結標本作製装置、自動ラベル印字装置、自動カセット印字装置、自動免疫染色装置、デジタル写真撮影装置付顕微鏡、バーチャルスライドシステム、次世代シークエンサーなど

[特色]

「患者さんのための病理診断」を目標に、病理部と医学研究院の形態機能病理学、構造病態病理学、保健学部門検査技術科学分野、歯学研究院の口腔病理学の各分野にわたって高度な専門性を持つ病理医の連携により、精度の高い病理診断がなされます。最終的な病理診断の決定に際しては、臨床医との連携も盛んに行われ、「チーム医療」の一員として診断・治療に貢献しています。

[教育]

初期臨床研修医、専攻医を受け入れています。また、医学科生や保健学科生の実習や大学院生の研修などを行っています。そのほか、細胞検査士を目指す技師の研修も受け入れています。職員も病院内外の勉強会、学会や研修会に参加することにより、診断能力の向上に努めています。

[学会施設認定]

日本病理学会、日本臨床細胞学会

遺伝子・細胞療法部

遺伝子･細胞療法部は、輸血センターと細胞免疫検査部門で構成される中央診療部門です。安全かつ適正な輸血･細胞治療システムと、迅速かつ正確な細胞免疫検査の提供に努めています。

部長　赤司浩一

アフェレーシスルーム

[得意分野]

自己血貯血を含む輸血療法の安全性確保と適正化に努めています。一元管理による適正な輸血療法の実施をサポートします。疾患ごとに最適な細胞治療とアフェレーシス治療を提供します。最先端の機器と技術による細胞免疫検査を提供します。

[診療体制]

教員4名(日本輸血･細胞治療学会認定医1名、細胞治療認定管理師1名)、医員6名、専任臨床検査技師10名(認定輸血検査技師3名、認定サイトメトリー技術者4名、認定HLA検査技術者3名、細胞治療認定管理師2名)、専任看護師2名、臨床工学技士1名の体制で、輸血･造血幹細胞移植･アフェレーシス治療に特化した診療･検査に従事しています。24時間体制での輸血検査と血液製剤の管理･出庫を行っています。

[診療方針]

患者さんの安心･安全を第一に考え、十分な説明と同意を得た上で、高い技術と知識に裏打ちされた質の高い輸血細胞治療とアフェレーシス治療に取り組んでいます。

[対象疾患]

■造血細胞移植治療の適応となる血液疾患(白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、再生不良性貧血など)、自己免疫疾患(強皮症など)
■血しょう交換の適応となる肝疾患、神経疾患、血液型不適合臓器移植、血液疾患、自己免疫疾患
■白血球除去療法の適応となる炎症性腸疾患
■自己血輸血の適応となる待機手術症例

[主な検査]

■輸血検査
■造血器悪性腫瘍細胞表面抗原検査
■キメリズム検査
■HLAタイピング検査
■抗HLA抗体検査
■造血幹細胞数およびCAR-T細胞療法のためのリンパ球数測定

[主な治療法]

■造血幹細胞採取･保存(末梢血、骨髄、さい帯血)
■血しょう交換療法
■白血球除去療法
■自己血貯血･保存

[学会施設認定]

日本輸血･細胞治療学会認定制度指定施設
日本輸血･細胞治療学会I&A認定施設

冠動脈疾患治療部

冠動脈疾患治療部(CCU)は、急性心筋梗塞、不安定狭心症などの緊急治療を要する心臓疾患のほか、心不全、重症不整脈などの高度な医療を必要とする症例の治療にあたっています。

部長　赤司浩一

冠動脈疾患治療部

[得意分野]

循環器内科と連携し、急性冠症候群に対する緊急心臓カテーテル検査、緊急冠動脈インターベンションに積極的に取り組んでいます。その他すべての循環器(心臓･血管)疾患の急性期治療もCCUが担当します。

[診療体制]

CCU教員は2名、医員3名ですが、循環器内科と併せて12名の教員、13名の医員が合同で診療にあたります。夜間帯は循環器内科およびCCUの2人の当直医が常駐し、24時間緊急心臓カテーテル治療が行える体制を整えています。救急外来到着から迅速に検査･治療を行っています。救命救急センターとも連携を図りつつ、つねに急患を受け入れられる体制をとっています。心原性の院外心停止に対する積極的な経皮的人工心肺(ECMO)や低体温療法なども行っています。

[診療方針]

初めて救急で運ばれて来る患者さんが多いため、十分な説明を行い、納得を得た上で検査･治療を開始するよう心がけています。緊急治療後は個室仕様の病床で安心して治療に専念していただけます。

[対象疾患]

急性心筋梗塞、不安定狭心症、その他の狭心症、心不全、劇症型心筋炎、急性肺血栓塞栓症、急性大動脈解離、肺高血圧症、重症不整脈、感染性心内膜炎、弁膜症など

[主な検査]

心臓カテーテル検査(IVUS、OCT、FFRを含む)、心臓超音波検査(3D、2Dストレイン、経食道を含む)、トレッドミル、12誘導･ホルター心電図、心肺運動負荷試験、ポリソムノグラフィ、心臓核医学検査、冠動脈CT、FFR-CT、心臓MRI

[主な治療]

冠動脈インターベンション(ロータブレータを含む)、末梢血管形成術、経皮的交連切開術、下大静脈フィルタ、カテーテルアブレーション(CARTO、EnSite使用)、永久ペースメーカ植込み*、植込み型除細動器(ICD)*、両心室ペーシング、大動脈バルーンポンピング、補助循環用ポンプカテーテル(インペラ)、経皮的人工心肺(ECMO)、経皮的心房中隔欠損閉鎖術、経カテーテル大動脈弁置換術(TAVI)*、経皮的カテーテル僧帽弁修復術(MitraClip)*、経カテーテル肺動脈弁留置術(TPVI)、経皮的左心耳閉鎖術、バルーン肺動脈拡張術、二相性陽圧呼吸、持続的血液濾過透析、補助人工心臓*、心臓移植*

*心臓血管外科と連携

腎疾患治療部

腎疾患治療部は1983年に開設された中央診療部門です。南棟4階に血液透析ベッドとして13床を保有しています。加えて、2006年から腹膜透析(CAPD)外来を開設しました。

部長　北園孝成

透析室の風景

[得意分野および診療体制]

血液透析の患者さんの維持透析、急性腎不全に対する緊急透析(約480例/年、約3,600回/年)、および腎不全、腎炎、ネフローゼ症候群、電解質や酸塩基平衡異常に関する他科からのコンサルテーション(約300例/年)に対応しています。CAPD外来では約50名のCAPD患者さんの管理を行い、年間約10例のカテーテル挿入術を施行しています。その他には、腎炎に対する腎生検と診断(約600例/年)、透析合併症としての二次性副甲状腺機能亢進症の治療や、胆道・膵臓・膵臓移植・腎臓移植外科と連携して腎臓移植の患者さんの内科的管理、移植腎に対する腎生検診断も行っています。

[診療方針]

腎疾患治療部では、蛋白尿から慢性腎臓病、血液および腹膜透析医療、腎不全に伴う合併症治療、さらには腎臓移植に至るまで腎臓に関する包括的医療を目指しています。看護師、臨床工学士の協力のもとにチーム医療を行い、患者さんにとって最善の治療を行えるよう十分な検討を行い、治療方針を決定しています。

[対象疾患および主な検査、治療]

■腎炎、ネフローゼ症候群
確定診断のための腎生検検査を行います。専門の腎病理医が診断し、腎組織カンファレンスで治療方針を決定します。

■腎不全、電解質異常に関するコンサルテーション
腎不全や電解質の管理、腎不全時の薬剤投与の注意点など、腎臓全般に関するコンサルテーションを受け付けます。腎前性・腎性・腎後性腎不全の鑑別のための腹部超音波検査を施行し、理学所見や他検査と合わせた総合的医療を行います。

■血液透析
血液透析患者の維持透析および急性腎不全に対する緊急透析、これに関連したバスキュラーアクセス造設術、人工血管移植術、透析用カテーテル留置術、経皮的血管形成術 (PTA)などを行います。

■腹膜透析
CAPD患者の内科的管理に加えて、外科的には腹膜透析カテーテル留置術から抜去術まで行います。

■二次性副甲状腺機能亢進症
専門医が副甲状腺超音波検査を含めた精査を行い、内科的治療、副甲状腺摘除術 (PTX)などを行います。

■腎移植
胆道・膵臓・膵臓移植・腎臓移植外科と連携して、腎臓移植患者のサポートを行います。腎臓移植前後の透析療法に加え、専門医が腎臓移植後の内科的管理や移植腎の病理診断を行います。

[学会施設認定]

日本腎臓学会認定施設、日本透析学会認定施設

総合周産期母子医療センター

母体の分娩ならびに母体、胎児、新生児のすべての疾患に対して集学的に診療を行うセンターです。

センター長　大賀正一

NICU手術風景

[得意分野]

緊急を要する母体や新生児を速やかに受け入れ、診療各科と連携して集学的な周産期医療を行います。

[診療体制]

総合周産期母子医療センターは母性胎児部門、新生児内科部門および新生児外科部門の3部門で構成し、専門スタッフが協力して診療にあたります。

[診療方針]

母体と胎児、新生児に高度で安心できる診療を行います。

[対象疾患]

■母性胎児部門
母体・胎児救急:母体搬送(24時間体制で対応)
ハイリスク妊娠・分娩:病気をもつ妊婦さんと胎児の集学的な妊娠分娩管理
母子精神保健:妊娠・分娩に伴う精神疾患の予防と母子精神支援

■新生児内科部門
早産児、低出生体重児を中心に、新生児仮死、呼吸障害、感染症、先天性心疾患、中枢神経疾患、内分泌代謝疾患、血液免疫疾患、先天形態異常などの、集中治療を要する新生児疾患

■新生児外科部門
先天性横隔膜ヘルニア、肺のう胞性疾患、臍帯ヘルニア・腹壁破裂、消化管穿孔、食道閉鎖、腸閉鎖、ヒルシュスプルング病、直腸肛門奇形、水腎症など

[主な検査]

■母性胎児部門
超音波検査:胎児の発育や形態異常、中枢神経機能の解析
胎児心拍陣痛図:中央監視システムで胎児の健常性を常時観察
羊水・臍帯血検査:羊水穿刺・臍帯穿刺による染色体検査、遺伝子解析、胎児血液検査

■新生児内科部門
超音波検査:心臓や脳の異常を非侵襲的に検査
AABR:退院前の新生児を対象とした簡易聴力検査
aEEG:ベッドサイドで行う簡易脳波モニタ
NIRS:近赤外線を用いた非侵襲的な脳の機能検査

■新生児外科部門
腹部超音波検査:非侵襲的な腹部臓器の画像検査
pHモニタ:胃食道逆流症の診断
消化管造影:消化管閉鎖、腸回転異常、ヒルシュスプルング病の診断
直腸粘膜生検:ヒルシュスプルング病などの診断

[主な治療]

■母性胎児部門
胎児水腫、胎児不整脈、先天性のう胞状腺腫様形成異常(CCAM)、閉塞性尿路障害などを対象に、胎児治療を行っています。

■新生児内科部門
Nasal CPAP:非侵襲的に新生児の呼吸を助けます。
HFO:長期人工呼吸による肺損傷の予防効果があります。

■新生児外科部門
NO(一酸化窒素ガス):肺血管抵抗を調節し、循環を管理します。
ECMO(人工肺)、血液透析など。新生児外科の手術は手術室だけでなくNICUやICUでも行い、その治療成績は全国屈指の救命率です。

[学会施設認定]

日本周産期新生児医学会・周産期専門医基幹研修施設、日本小児外科学会専門医認定施設、日本産科婦人科学会専攻医指導施設、胎児心臓病超音波検査専門施設

リハビリテーション部

リハビリテーション部は、すべての診療科の依頼を受けて、さまざまな疾病や障がいがある患者さんに対して手厚いリハビリ診療を提供し、新しい医療技術の研究開発を行い、社会人や学生に対する教育啓発にも努めています。

部長　中島康晴

広い理学療法フロアでの運動療法

[得意分野]

骨軟部腫瘍や関節疾患、脊椎疾患など運動器疾患のリハビリをはじめ、心臓リハビリや呼吸理学療法、脳血管疾患、小児や終末期のリハビリや言語聴覚療法など、全診療科の幅広いニーズに応えています。

[診療体制]

医師3名、理学療法士(PT)23名、作業療法士(OT)6名、言語聴覚士(ST)2名が、それぞれの職能を活かし、心を込めてリハビリ診療を行います。施設基準は、脳血管疾患Ⅰ、運動器Ⅰ、呼吸器Ⅰ、心大血管疾患Ⅰ、がんの5種を取得し、総合的なリハビリ医療環境が確保されています。

[診療方針]

主治医の治療方針とオーダー内容を遵守しながら、リハビリ独自の専門性や特殊性を活かして、患者さんとご家族を支える医療チームとして治療方針を立て、経過に応じて適宜修正を行います。また、リハビリ部門は「病院内と、家庭や社会との架け橋」としての機能をもち、医療連携や地域貢献を進めています。

[対象疾患]

整形外科疾患の術前・術後リハビリが全体の約30%を占めますが、脳神経外科や神経内科疾患のリハビリ、心臓血管外科の術後や循環器内科の心大血管リハビリ、臓器移植術や多発外傷後のICUでの急性期リハビリ、長期臥床・安静後の廃用症候群に対するリハビリなど、小児から高齢者まで各診療科のさまざまなニーズに応えています。診療患者数は毎日290名、年間診療患者数は約75,000名、初診依頼数は年間5,200名を超えて、さらに増加中です。

[主な検査]

体圧センサーを用いた座圧分布測定(SRソフトビジョン)
簡易上肢機能検査(STEFF)
高次脳機能障害の各種検査
重心動揺計(バランスコーダ)
三次元動作分析システム(VICON)
シート式下肢加重計(ウォークWay)
肺運動負荷モニタリングシステム(エアロモニタ)

[主な治療]

徒手で治療を行いますが、一部機器も使用します。
膝関節等速性筋力トレーニング(COMBIT)
上下肢全身運動器(ニューステップ)
電気刺激装置

メディカル・インフォメーションセンター

メディカル・インフォメーションセンター(MIC)は、病院情報システムの安定した稼動を担うとともに、蓄積した電子データの管理や解析の支援を行います。また、インターネット回線を含めた病院全体の情報セキュリティの管理も行っています。

センター長　中島直樹

電子カルテ端末

[運営体制]

MICでは、多職種スタッフ(医師、看護師、薬剤師、診療録管理士、統計・疫学専門家、エンジニア、事務職員など)が役割分担をして効率よい協働体制を構築しています。これにより、診療現場や病院内各部署への診療・研究支援体制を強化すると同時に、病院全体の情報システムの統合的管理が可能となりました。

[運営方針]

九州大学病院は、2019年1月に電子カルテの更新を行い、システムの整備が進みました。解決するべき課題も山積みですが、これからもより使いやすいシステムを構築するための努力を継続します。また急激に蓄積する電子データを安全に管理しながら解析する基盤を構築することにより、各部署や診療科のさまざまなニーズに対して支援を行います。さらに疾病コホート研究やデータ駆動型研究などの臨床研究面での支援を積極的に推進します。

[業務内容]

■病院情報システムの管理、部門システムを含めたネットワーク管理、地域医療ネットワーク管理、インターネット監視、災害時バックアップシステム管理
■臨床観察研究支援、データ駆動型臨床研究支援、医療情報システム研究、遠隔医療研究支援、CBT実施支援

[設備]

■病院情報システム:サーバ・情報機器群、電子カルテ端末、医用画像フィルムレスシステムなど
■病院情報ネットワーク:電子カルテネットワーク、部門システムネットワーク、九州大学総合情報伝達システム(KITE)、地域医療ネットワーク

[特色]

MICは、各部署や各診療科との話し合いを広くもちながら、医療安全管理や医療の質向上を担うと同時に、患者さんにも医療者にも優しいシステムを目指しています。
また、データ解析基盤の充実と人材確保に重点を置くと同時に九州大学本部のサイバーセキュリティセンターとの連携も行い、情報セキュリティを強化しています。さらには、アジア遠隔医療開発センターを擁する国際医療部と協力し、国際的な活動を展開しています。

[教育]

医療情報、統計学に関する教育を提供すると同時に、医療系統合教育センターと共同で、学生実習用電子カルテの教育・運用にあたっています。また、研修医や新任職員への情報リテラシーオリエンテーションやオーダ研修を行っています。さらに電子カルテを用いたデータ検索・抽出に関する講習会を定期的に開催しています。

[学会・行政施設認定]

医療情報データベース(MID-NET)事業協力医療機関
臨床研究中核病院ネットワーク事業参加医療機関
社会系専門医研修連携施設

光学医療診療部

光学医療診療部は診療科ごとにそれぞれ独立して行われていた内視鏡検査を統合し、効率的で安全かつ快適な検査・治療を行える診療体制を整えています。多数の内視鏡専門医、看護師、臨床工学技士の下に、最新の機器を導入し、最先端の検査・治療を行っています。

部長　仲田興平

上部消化管内視鏡検査

[得意分野]

現在、透視検査が可能な部屋も含め8室の検査室があり、それぞれ独立した部屋となっています。8台の内視鏡検査装置がハイビジョン対応で、より鮮明な画像を得ることができるようになりました。最近脚光を浴びている内視鏡的粘膜下層剥離術にも最新の機器を設置し、対応に力を入れています。また海外(とくにアジア)との交流も活発で、高速インターネット回線を使ったカンファレンスを日常的に行うとともに、アジア各国から多くの研修生を受け入れています。

[診療体制]

多数の消化器内視鏡学会指導医・専門医、呼吸器内視鏡学会指導医・専門医、看護師、臨床工学技士などの専門スタッフが勤務し、年間15,000件を超える内視鏡検査と治療を行っています。

[診療方針]

安全かつ快適な内視鏡検査・治療が患者さんに行われるよう、つねに心がけています。使用する内視鏡の使用状況、洗浄・消毒の記録を残すシステムを導入するなど、感染対策にも力を入れています。

[対象疾患]

■食道:食道癌、食道炎、食道静脈瘤、食道狭窄など
■胃・十二指腸:胃癌、胃潰瘍、胃ポリープ、胃炎、十二指腸潰瘍、胃悪性リンパ腫など
■小腸:小腸腫瘍、小腸ポリープ、小腸出血など
■大腸:大腸癌、大腸ポリープ、潰瘍性大腸炎、クローン病など
■膵臓・胆道:胆石症、胆道癌、胆管結石症、膵臓癌、胆管癌など
■呼吸器:肺癌、間質性肺炎など

[主な検査]

上部消化管内視鏡検査、下部消化管内視鏡検査、気管支鏡検査、逆行性膵胆管造影検査、ダブルバルーン小腸内視鏡検査、ダブルバルーン内視鏡アシスト下逆行性膵胆管造影検査、カプセル内視鏡、超音波内視鏡検査、超音波内視鏡下穿刺吸引細胞診、管腔内超音波検査、経気管支肺生検、超音波気管支鏡など

[主な治療]

■消化管:内視鏡的静脈瘤結紮術、内視鏡的硬化療法、内視鏡的ポリペクトミー、内視鏡的粘膜切除術、内視鏡的粘膜下層剥離術、内視鏡的止血術、バルーン拡張術、ステント留置術など
■胆道・膵臓:内視鏡的乳頭切開術、超音波内視鏡下穿刺吸引法、内視鏡的ステント留置術など
■呼吸器:レーザー治療、バルーン拡張術、ステント留置術など

先端医工学診療部

先端医工学診療部は、「低侵襲診断」「低侵襲治療」をモットーに、患者さんに優しい「精確」で安全な医療の提供を目指して診療を行っています。世界最先端の医療機器をいち早く導入し、手術支援ロボットや高度医療技術を駆使して、より侵襲の少ない治療法を、より早くより多くの患者さんに提供できるよう、さまざまな診療科と臨床応用を行っています。

部長　沖　英次

病的肥満症に対する腹腔鏡手術

[得意分野]

■病的肥満に対する内視鏡外科手術
最近では、腹腔鏡下スリーブ状胃切除術という病的肥満に対する内視鏡外科手術を行っています。糖尿病、高血圧、高脂血症などの合併症も高い確率でコントロールすることが可能です。
■手術支援ロボットダヴィンチを用いたロボット手術
■ナビゲーション技術を用いた低侵襲治療
■内視鏡を用いた低侵襲治療
■最新治療機器を用いた臨床応用

[診療体制]

一般外科のみならず泌尿器・前立腺・腎臓・副腎外科、小児外科・成育外科・小腸移植外科、整形外科、脳神経外科、耳鼻咽喉・頭頸部外科など多岐にわたる臨床系指導医のほか、工学博士などの先端医療を専門とするスタッフが勤務し、各診療科と協力することで、現在、診療対象症例を徐々に増やしています。

[主な治療]

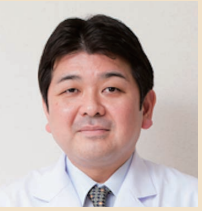
■内視鏡的治療
異物除去、上部および下部消化管出血止血、食道静脈瘤出血止血、胃静脈瘤出血止血、消化管粘膜腫瘍切除、逆流性食道炎に対する内視鏡的噴門形成術など
■画像誘導下治療
CTや超音波画像などから作り出したナビゲーション画像を基に、手術をより効率よく、安全に行う方法です。現在、外科、内科、整形外科、泌尿器・前立腺・腎臓・副腎外科(泌尿器科)、小児外科・成育外科・小腸移植外科(小児外科)、耳鼻咽喉・頭頸部外科(耳鼻咽喉科)、脳神経外科、歯科と協力して研究、臨床に取り組んでいます。
■ロボット手術
内視鏡下手術のほとんどすべてが対象となります。
適応例:食道切除術、胃切除術、大腸切除術、腎摘出術、膵切除術、総胆管切開術、胆のう摘出術(小児例含む)、噴門形成術(食道裂孔ヘルニア胃、逆流性食道炎に対する手術)、脾臓摘出術(小児例含む)、前立腺全摘術など。
アクセス困難な場所や、縫合など複雑で綿密な手術操作を必要とする手術に適します。上記以外にも適応症例は徐々に増えています。
■内視鏡外科手術トレーニング
本診療部は、2004年に学内外の外科医を対象に設置された「九州大学病院内視鏡外科手術トレーニングセンター」の運営を担当し、2,000名を超える受講生を輩出しています。

[学会施設認定]

日本肥満症治療学会、肥満外科手術認定施設

子どものこころの診療部

子どもと養育者のメンタルヘルスのために、九州大学病院の関連診療科やセンターと、九州大学の多職種・多領域が協働して治療や支援に取り組みます。


部長　中尾智博

診療スペース

[得意分野]
発達障がいがある子どもの総合的な診断評価と関連機関との連携・家族支援、周産期医療と連携した女性のこころの健康と育児支援、乳幼児期のこころの問題。

[診療体制]
児童精神科認定医、臨床心理士を中心に、子どものこころの育ちに関わる小児医療センター、総合周産期母子医療センターなど院内関連部門のスタッフと連携して治療にあたります。

[診療方針]
個人のライフスパンを視野にいれて、さまざまなこころの育ちと健康のあり方をサポートします。子どもと家族の安心・安全な生活のために地域医療、教育、福祉など関連領域との連携を重視します。

[対象疾患]
■子どものメンタルヘルス：注意欠如・多動症／注意欠如・多動性障害、自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害、限局性学習症、限局性学習障害などの行動のコントロール、社会性、学業のつまずきにつながる発達障害。うつ病、不安障害など子どもの情緒の問題。チック、トゥーレット障害などの習癖の問題、心的外傷などストレス関連障害
■養育者のメンタルヘルス：周産期うつ病、育児不安、養育困難のリスクをもつ母親と家族、発達障害がある子どもの家族への支援

[主な治療]
■子どものこころと育ちの総合的な診断評価：国際的に標準化された児童精神医学の診断技術や多面的な発達検査・心理検査・医学検査を組み合わせて、子どもと家族にわかりやすい診断と治療プログラムを提案します。情緒・行動の問題に対しては最新の薬物療法と心理療法を組み合わせた治療を提供します。地域の支援機関や教育機関での対応にも役立つ診療情報の提供を通じて、支援のネットワーク作りに積極的に取り組みます。
■周産期からはじまる母子のこころの健康支援：総合周産期母子医療センターと連携して、こころの健康にリスクをもつ女性に、妊娠期から、赤ちゃんとの出会いや育児のスタートへとつながる予防や早期支援のためのメンタルヘルスサービスを提供しています。こころの問題をもつ養育者が、安心・安全な出産・育児が行えるよう助産師、精神科医、産科医、心理士のチームによるサポートも行います。

[学会施設認定]
日本精神神経学会、日本児童青年精神医学会、日本乳幼児医学・心理学会

ARO次世代医療センター

ARO次世代医療センターは、先端技術に立脚した新しい医療の開発を支援し、推進するために設置された組織です。科学的で倫理的、かつ信頼性の確保された臨床研究を推進し、医学の発展に貢献することが使命です。医療法上の臨床研究中核拠点病院の中枢を担っています。

センター長　戸高浩司

臨床研究コーディネータによる治験の説明

[運営体制]
ARO次世代医療センターは、九州大学生命科学革新実現化拠点を形成し、橋渡し拠点としても機能しています。

[運営方針]
未来に繋がる新しい医療を開発することは、九州大学病院の大きな使命の一つです。ARO次世代医療センターでは、この未来医療の開発という目標に向かって幅広い分野の専門職が協力して活動しています。そしてイノベーション人材の育成に取り組んでいます。

[業務内容]
■TR(トランスレーショナルリサーチ)の支援
・シーズ探索、開発戦略、知財戦略、産学連携、薬事戦略などに関する業務
・非臨床フェーズおよび臨床フェーズのTRの実施支援
・安全性情報の収集と管理に関する業務
・臨床試験物製造に関する業務
・製造された試験物の安全性評価に関する業務
・TRや臨床研究から得られる生体情報の解析に関する業務
■臨床試験の支援
・企業治験、医師主導治験、先進医療、患者申出療養などの支援
・研究者主導型臨床研究(特定臨床研究を含む)の支援
■生物統計学的支援・データマネジメント
■モニタリング業務・監査業務
■教育研修活動、広報活動

[特色]
当センターには医学、歯学、薬学、看護学の専門職に加えて、生物統計、レギュラトリーサイエンス、医学倫理、知財、薬事などの専門家が100名以上在籍しています。遺伝子治療や細胞療法などの先進的医療や、新薬開発を目指した治験はもとより、九州大学病院で行われるすべての臨床研究をより質の高い倫理的な研究とするため、研究者に対する専門的アドバイスや業務支援を行っています。臨床研究が安全かつ適正に実施されているかどうかを定期的にチェックし、研究者に対して助言、勧告や警告も行います。また看護師、薬剤師、臨床検査技師で構成される臨床研究コーディネーターは、TRや治験等の臨床試験に参加する患者さんの安全と倫理性を確保しながら、研究が適正に円滑に進むよう日々努めています。

[教育]
九州大学病院では臨床研究に参加する全てのスタッフに、倫理・法規・科学的事項・業務などの講義を受け、試験に合格することを義務付けています。この臨床研究認定制度において、現在、医師855名、メディカルスタッフ1,611名が認定されています。さらに医師318名、メディカルスタッフ185名は介入試験のPrincipal Investigatorになるために上位資格のPI認定を受けています。また、認定更新のための講習会を毎年30回程度開催しています。

臨床教育研修センター

2004年から始まった新研修医師制度に合わせて設立され、2006年からは新歯科医師研修制度が始まり、現在、医師・歯科医師の卒後教育を統括する部門となっています。研修医と研修歯科医がより良い環境の中で研修ができ、自ら学び、積極的に経験ができるよう、あらゆる面から研修医をサポートします。

センター長　新納宏昭

支援教員会議

［運営体制］

臨床教育研修センター長、副センター長（医科、歯科部門各1名）、専任教員2名、医員1名、センター支援教員（医科、28名）、カリキュラム委員（歯科、17名）により構成されています。

［運営方針］

九州大学病院では、病院の基本理念である、患者さんに満足され、医療人も満足し、医療の発展に貢献できる医師、歯科医師、研究者を育てることを目指しています。

［業務内容］

■初期研修医／研修歯科医に対する業務

・初期研修医／研修歯科医の採用試験の実施、初期研修プログラムの作成・初期研修プログラムの説明会の実施、初期研修医／研修歯科医への入職時のオリエンテーション、初期研修医／研修歯科医の評価（PG-EPOC: 医科、臨床研修習熟度評価: 歯科）指導・初期研修プログラムの評価と見直し・研修管理委員会による研修修了判定、研修医手帳（医科）・研修医記録簿（歯科）の作成と管理、支援教員会議（医科、四半期一回）・カリキュラム専門委員会（歯科、不定期）を実施、講習会（月一回）の企画と統括（九大病院グランドラウンド、福岡臨床研修セミナー、呼吸管理セミナー、研修歯科医対象臨床セミナーなど）、初期研修医／研修歯科医の年2、3回のヒアリング、初期研修医／研修歯科医に対するワクチン接種

■後期（専門医）研修（医科）／後期研修医（歯科）に対する業務

■新専門医制度に関する説明会実施・後期研修のコーディネートと管理

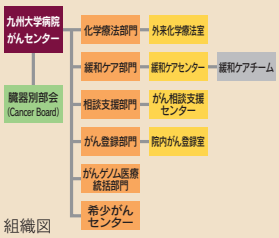
［特色］

当センターは、研修医と研修歯科医がより良い環境の中で研修ができ、自ら学び、積極的に経験できるように、研修生活をあらゆる面からサポートします。初期研修プログラムの管理・運営は、当センターが研修医の希望を考慮して実施しています。本プログラムの研修施設は、本院と研修協力病院、研修協力施設などが一体となった臨床研修病院群で構成され、円滑な連携に努めています。国立大学附属病院臨床研修協議会との連携も行っています。すべての研修医が公平で一貫した初期研修に専念することができるようサポートします。また、その後の後期（専門医）研修にスムーズに移行できるように、新専門医制度に関する説明会や後期研修のコーディネートも行っています。

がんセンター

九州大学病院は、2008年2月8日に厚生労働省から福岡県の都道府県がん診療連携拠点病院に指定されました。九州大学病院がんセンターは院内のがん医療の充実を図り、また地域のがん診療連携拠点病院と共に、福岡県のがん医療を推進するために活動しています。

センター長　馬場英司



組織図

［運営方針］

都道府県がん診療連携拠点病院として、本院はもとより県内のがん医療推進に努めます。我が国のがん対策推進基本計画の骨子である、がん予防、がん医療、がんとの共生、そしてこれらを支える基盤の整備という視点を踏まえ、安全ながん薬物療法、緩和医療、相談支援、がん登録などの充実を目指すと共に、中心的課題であるがんゲノム医療や希少がん・難治がん対策にも積極的に取り組み、患者さん本位のがん医療の実現を目指します。

［業務内容］

九州大学病院がんセンターには6つの下部組織があります。

■**「外来化学療法室」**外来における抗がん剤治療を担当するとともに、本院の抗がん剤治療の内容を精査し標準化するために化学療法レジメン管理を行っています。外来での抗がん剤治療を安全に実施すべく活動しています。

■**「緩和ケアセンター」**医師、看護師、薬剤師、公認心理師が参加し、入院治療中のがん患者さんの身体的・精神的苦痛を和らげるために活動しています。当センターには専任の看護師がジェネラルマネージャーとして在籍し、拠点病院や在宅医療機関との緩和医療連携体制の強化を進めています。

■**「がん相談支援センター」**看護師とソーシャルワーカーが在籍し、院内・院外のがん患者さんやご家族のさまざまな相談に対応しています。また、地域医療機関と密接に連携し、がん患者さんが地域においても適切な療養環境が得られるように支援しています。

■**「院内がん登録室」**本院では年間約4,000例の新規がん患者さんの治療情報を収集・登録しています。これは西日本の医療施設の中では最大の登録数であり、がん治療の実績や予後情報をホームページなどで広く公開しています。

■**「がんゲノム医療統括部門」**本院は2018年2月に九州で唯一のがんゲノム医療中核拠点病院に指定されました。がんゲノム医療は、がん細胞の多数の遺伝子を同時に解析して患者さん固有の治療を行おうとする新しい医療であり、これには多く分野の専門家の協力が必要です。本院では当部門がこれを担当し実施しています。

■**「希少がんセンター」**希少がんは罹患率が人口10万人当たり6例未満とされ、頻度の高いがんに比べて診断や治療が困難です。診療上不利な状況にある希少がん患者さんの診療やセカンドオピニオン、その他の診療支援を迅速かつ適切に実施することを目的として、当センターを新設しました。また、希少がんセンターに「希少がんホットライン」を開設し、希少がんに関する様々な問合せに対応しています。

［院内活動の特色］

がんセンターが運営を担当している組織として18の臓器別専門部会があり、それぞれの部会に内科医、外科医、病理医などの専門医や薬剤師、看護師が参加し、診療科の枠を超えてがんの治療方針を討議しています。また、「九州大学病院がんセミナー」を定期的に開催し、院内と地域の医療者を対象に最新のがん治療に関する情報提供を行っています。

油症ダイオキシン研究診療センター

油症ダイオキシン研究診療センター（以下センター）は、1968年に発生したカネミ食用油による食中毒事件（以下油症）の治療法開発の推進と発症機序の解明に向けた研究を推進する研究診療拠点として2008年に設置されました。

センター長　中原剛士

油症支援室

［得意分野］

油症はカネミ油に混入していたPCB類やダイオキシン類による複合中毒です。犠牲者の方々は発生当初はもとより、約50年が経過した現在でもさまざまな症状に苦しんでいます。PCB類やダイオキシン類の人体影響については未解明の部分が多く、地球環境の視点から考えてもきわめて重要な課題です。油症の「病態および発症機構」を解明することによってダイオキシン類が人体にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることは、人類全体にとっても有益であると考えます。このような社会的・学術的な要請を満たすべく、九州大学病院油症ダイオキシン研究診療センターは診療、研究、患者支援を行っています。

［診療体制］

センター長は中原剛士とし、准教授1名、助教3名（大学内1名、長崎大学2名）、学術研究員1名、看護師1名、メディカルソーシャルワーカー1名、テクニカルスタッフ1名、事務補佐員1名を配置します。全国油症治療研究班や各診療科と連携して疫学調査、臨床試験、検診、診療、油症相談員や患者会支援の業務を実施します。また長崎大学病院、各地域のかかりつけ医や患者会との連携を緊密にしています。さらに、油症診療ネットワークとして、油症外来（皮膚科）を窓口に各診療科（眼科、呼吸器科、産科婦人科、耳鼻咽喉・頭頸部外科、神経内科、心療内科、整形外科、内科、歯科、循環器内科）を紹介しています。

［診療方針］

油症の解明や治療法の開発を求める油症患者のニーズに合わせ、迅速かつ的確な診療を行えるよう関連各診療科と緊密に連携をとり、患者さん中心の診療に取り組んでいます。当センターが中心となって、ダイオキシン類の人体影響を明確にするために不可欠な疫学調査を押し進め、ダイオキシン類の排泄促進や症状を軽減させる治療法の開発のための臨床試験を促進させています。そして、長期的課題である油症の解明と新しい治療法開発につながるような基礎的研究も発展させていきたいと考えています。また、当センターが中核となり、長崎大学病院はもとより、各地域のかかりつけ医との連携を強め、油症治療の普及・発展を推進します。

［主な業務］

油症に関する健康実態調査、疫学、検査、治療、基礎的研究

医療連携センター

九州大学病院は高度急性期病院で、先進医療や救急医療、がん医療、脳血管疾患、循環器疾患、小児医療、移植医療、難病医療などの高度医療が必要な患者さんを数多く受け入れて地域医療に貢献する責務があります。医療連携センターは、地域医療機関から患者さんを円滑に受け入れるための活動を行うとともに、高度医療を終えた患者さんが地域で安心して療養できるように支援しています。

センター長　中川尚志

センターの相談受付

［運営体制］

センターに運営委員会を設け、医科・歯科から選出された医師や、看護師、社会福祉士、事務職員など、多職種で地域との医療連携のあり方を協議しています。予約センター、在宅療養支援室、社会福祉相談窓口がそれぞれ役割を分担し、患者さんからの相談対応、紹介患者さんの受け入れ、退院に向けての在宅療養支援、転院先紹介、社会福祉相談などを行っています。

［運営方針］

患者さんが住みなれた地域で必要とする医療を安心して受けられるよう、高度医療を担う本院とそれぞれに特長をもつ地域の医療機関が密接に連携することを主眼に活動します。院内の関係部署である患者相談支援室、国際診療支援センターやがん相談支援センターとも連携しています。

［業務内容］

■予約センター：地域の医療機関から紹介される患者さんが円滑に本院を受診でき、満足を得られる診療が受けられるように支援します。

■在宅療養支援室：入院中の患者さんが退院し、在宅医療が必要となった場合に、地域医療機関と連携をはかりさまざまな支援を行っています。

■社会福祉相談窓口：社会福祉士が中心となり、医療費に関する相談や、さまざまな生活支援に関する相談、あるいは地域医療機関との連携を担当しています。

■院内病床管理業務：高度医療を迅速に提供するために、看護師長を中心として共通病床や空床を効率的に管理・運用しています。

■入退院・周術期支援センター：患者さんが安心して安全に入院、手術、治療、検査を受けられるよう、スタッフが各科担当医師や、手術部、病棟、事務と連携し、入院前から患者支援を行っています。

［特色］

九州大学病院で治療が必要な患者さんの受け入れから、病床の管理、退院・在宅療養に至るまで高度医療が必要な患者さんをトータルに支援します。

［教育］

地域医療連携をテーマにした講演会を開催し、院内外からの医師、看護師、介護士、理学療法士、社会福祉士など、さまざまな職種の参加を募り、意見交換を行っています。

グローバル感染症センター

グローバル感染症センターは、院内における感染対策の充実を行っています。さらには、地域の医療機関をはじめ、アジア地区におけるネットワークの形成を通じ、お互いの感染対策の充実を図ります。

センター長　下野信行

グローバル感染症センター委員会

[運営体制]

グローバル感染症センターは、センター長、専任の医師2名、看護師3名、薬剤師1名、事務職員2名で構成されています。委員会は、医科部門の医師8名、歯科部門の医師2名、看護師4名、薬剤師2名、臨床検査技師3名、栄養管理士1名、事務職員2名の参加のもと開催しています。

[運営方針]

感染症対策は、個々の医療機関における対策のみでは困難となり、グローバルな視点にたった対策が求められています。院内における感染対策の充実はもちろんのこと、近隣の医療機関をはじめとした、地域・アジアに向けた感染対策の拡充を図っています。

[業務内容]

■院内向け業務

抗菌薬の適正使用に関する指導、定期的な院内ラウンド、感染対策マニュアルの作成、感染制御に係る職員の教育・研修、院内感染発生時に必要な指導、感染制御に係る連絡調整、その他、院内感染予防の推進など

■院外向け業務

行政、地域医療機関およびアジア医療機関とのネットワークの整備・拡充、人材育成プログラムの開発、渡航前のワクチン接種、グローバル化する感染症に対する研究など

[特色]

院内感染において脅威となっている多剤耐性の腸内細菌科細菌やアシネトバクター、パンデミックな感染を引き起こす新型インフルエンザや新型コロナウイルスなどのように、さまざまな病原微生物に対する感染対策は、一つの医療機関の対策のみでは不可能となりつつあります。そして、多剤耐性菌や鳥インフルエンザなどは、とくにアジア地区に多い現状があります。このような社会的背景のもと、グローバル感染症センターが開設されました。院内業務のみならず、院外に対してもネットワークを通じて、教育・啓発活動を行い、情報発信を行っていくためです。

これまで、福岡地区には、地域の医療機関を中心とした感染対策に関する組織として、「福岡ICT交流会」が存在していましたが、これを基盤として2012年度より福岡地区感染対策ネットワークを構築し、地域医療機関との連携を深めています。また、福岡は、アジアに対する空、海の玄関口であるため、各種輸入感染症に対する対策の充実が求められています。当センターは韓国の釜山大学病院感染制御チームとネットワークを構築しています。新型コロナウイルス感染症においてもネットワークを通じて情報共有を行い、迅速かつ適切な感染対策を行っています。

[学会施設認定]

日本感染症学会 研修施設認定、日本環境感染学会 認定教育施設

医療安全管理部

九州大学病院が提供する医療の安全を確保するために、医療内容や病院システムを把握して、間違いを誘発しない環境や事故を未然に防ぐことのできるシステムを整備するための中心的役割を担っています。

部長　後　信

医療安全管理部会

[運営体制]

医療安全管理部長、医療安全管理副部長、医療安全管理者(セーフティマネージャー)4名と24名の部員で構成され、医療に係る安全管理を行っています。

[運営方針]

患者さんが安心して医療を受けられるよう医療安全の確保と信頼の維持・向上を目指します。

[業務内容]

■医療安全の推進、医療事故防止に関すること

インシデントレポートを促進し、それを分析した結果を診療科・部門などにフィードバックし、事故防止に繋げます。

各部門における医療安全対策の実施状況の評価に基づき、医療安全確保のための業務改善計画書の作成、それに基づく医療安全対策の実施状況と評価結果の記録を行います。

医療安全に資する診療内容のモニタリングと職員の医療安全の認識の状況の確認を行います。

医療安全管理マニュアルの編集と見直しを行います。

死亡・死産事例報告の報告状況の確認、報告内容の検証を行います。

医療事故調査制度に係る報告、事例検討会、委員会などを開催します。

国立大学附属病院長会議の医療安全管理体制担当校とともに、他の特定機能病院と相互連携して行う、医療に係る安全管理の改善のための技術指導を行います。

国立大学附属病院医療安全管理協議会では学術・広報委員会委員を九州大学病院医療安全管理部員が務めています。

■医療安全に係る職員の教育・研修に関すること

安全に対する意識の向上や、安全な業務の遂行につながる研修を企画・実施します。

■インシデントやアクシデントへの対応に関すること

事実の確認、患者さんへの対応確認などを行うとともに、その内容に応じた指導を行います。

診療録や看護記録などの確認と、適切な記録のための指導を行います。

改善策を検討し、必要があれば病院全体へ周知します。

改善策が実施されていることの確認や、必要な指導を行います。

[特色]

医療安全管理部はさまざまな職種の部員から構成されています。さらに他学部の教員にも協力を仰ぎ、多角的な意見を取り入れて医療安全の向上に努めています。